

## 第 14 回山のトイレを考えるフォーラム開催にあたって

山のトイレを考える会・代表 岩村和彦

平成 25 年度を迎え、皆さまにおかれましてはいかがお過ごしでしょうか。昨年末から今年にかけて本州の冬山では多くの遭難事故があったことは記憶に新しいところです。幸運に助かった人もいればいまだに行方不明の方もおります。私自身も一山愛好家として、心して冬山に向かわなければ、と改めて認識を新たにします。

さて今年も第 14 回目のフォーラムを迎えることができました。多くの皆様のご協力があつて開催できますことにお礼申し上げます。

昨年の活動状況については後ページに書いてある通りです。

毎年恒例となっている山のトイレデーも昨年は天候不順が祟り、参加者も実施山域も限られました。全体的には、トイレ紙の持ち帰りの意識が相当根付いていると思われませんが、それでも百名山などの休憩適地には、ちょっと木陰に入れば放置された紙が目につくのは残念な限りです。また一部ではありますが、日時が経てば融けるという理由でトレットペーパー放置への無理解もあります。美観の点からは勿論のこと、高山という低温冷涼な地域では下界のように容易に融解しないということ、これからは訴え続ける必要性を感じるものです。

以前当会で制作したマナーガイドをさらに簡便にした携帯式マナーガイドを作成しました。持ち運び安くしましたので、いろいろな機会に登山者への配布にご協力いただきたいと思います。

さて、今回フォーラムのテーマは「現場に学ぶ！北海道の山トイレ」です。ご存じのように北海道と本州各地のトイレ事情は大きく違っていています。有人、有料の営業小屋が多々あり、そこでトイレを使える本州と違い、北海道では無人の避難小屋がほとんどです。当然トイレも無人であり、その維持管理も利用者のマナーにかかっている部分が多いものです。限られた有人の山小屋も、トイレについては様々な問題を抱えているのは御承知の通りです。全道各地でその維持管理をされている方のご苦労に対しては心より感謝を申し上げます。

今回はその現場からのご報告をもとに、皆さまとのディスカッションを通じて、北海道の山のトイレ問題への理解を深め、諸問題解決のための方向性と対策を見つけることが出来ればと考えています。

今後より進むであろう少子高齢化と国や地方自治体財政の逼迫などの社会情勢とも、山のトイレ問題解決は決して無関係ではあり得ません。そしてそれは私達登山者自身のトイレ問題への取り組み方がますます問われていると言ってもいいでしょう。

皆さまと意義ある議論ができますことを心より願っております。